

平成22年度総会・特別講演会報告

Report on the JSPME General Assembly 2010 and the Special Lectures

大正薬品工業(株)
TAISHO PHARM. IND., LTD.

佐藤 耕治
Kouji SATOU



挨拶する川島嘉明会長

平成22年度は、製剤機械技術研究会が創立されて20周年を迎える。この節目にあたる総会および特別講演会が4月12日(月)文京シビックホール(東京都文京区)にて開催された。その内容を下記のとおり報告する。

1. 総会

司会者の木村孝良事務局長より、本会の出席者が46名、委任状出席が359名の合計405名であり、会則第26条に定める会員数836名の4分の1(209名)以上の出席を満たし、本会が成立している旨報告され、開会が宣言された。

開会に当たり、川島嘉明会長から以下の挨拶があった。

平成22年度は、創立20周年の節目にあたる。製剤機械技術研究会は世界的視野、レベルの面から見てもユニークな会である。製薬の業界はもちろんのこと、マシーナリー、インフラの業界を含め、会の運



会場風景

営に対して多くの協力がある。また、アカデミアは薬学が6年制となり、Physical PharmacyやIndustrial Pharmacyの教育をどうするか問題となっている。これに力を注ぐのも本会の大きな役割との自負がある。薬業界には2010年問題、国家レベルでは高齢化の問題があるが、この問題解決に本会が貢献している。この会が20周年を迎え成人式という市民権を得ることになる。会員各位の協力を願いたい。後の議題にもあるが、今回、会長を岡田弘晃先生にバトンタッチする。法人化という重要課題を迎え、現役バリバリの岡田先生に会長をお願いしたい、と締めくくられた。

引き続き、会則14条の1にしたがい、川島会長が議長となり議事に入り、議事録署名人として、千代田化工建設株式会社の松本治氏、株式会社ミュチュアルの平山芳昭氏が選出された。

[第1号議案] 平成21年度会務報告に関して板井茂副会長から研究会全体および各委員会の活動内容が説明され、承認された。引き続き、[第2号議案]では平成21年度収支決算報告について草井章副会長からの説明に引き続き、砂田久一監事から、山口博之監事立ち会いのもとに行った監査の結果、当会計結果は正確であった旨の報告がなされ、共に承認された。[第3号議案]は平成22年度会務計画である。板井茂副会長から本年度は20周年記念行事として記念大会の開催、工場見学会ではシンガポールの工場を視察、さらには製剤機械技術ハンドブックの発刊などを含む会務計画案が示された。また、各委員会活動も積極的に実施していく旨提案があり、承認された。[第4号議案]では収支予算案が草井副会長から示された。本年度は記念行事を執り行うが、このための積立金を使用する一方で、それぞれの会務への支出については、これを圧縮した案であることが示され、承認された。[第5号議案]として役員改選について板井副会長からの説明があった。川島嘉明会長が退任され、岡田弘晃副会長が新会長に就任、また、岡田副会長の後任として安藤英信氏が新副会長に就任すること。また、常任委員、委員の退任・新任についても案がそれぞれ示された。さらに、川島会長は顧問に就任すると案が示され、承認された。[第6号議案]「一般社団法人（非営利型）への法人化」について、板井副会長から説明がされた。本件は、平成18年度の総会において、その検討が承認されている。その後、種々の法人の形態およびその運営の方法について検討してきた。平成22年度は、一般社団法人（非営利型）の形態を選択し、その法

人化に向けて行動するとの説明がなされ、承認された。

続いて「第10回製剤機械技術研究会仲井賞」受賞者の選考結果について、岡田弘晃選考委員長から、2件、2名の候補について、新規性、実用性、社会における貢献度の観点から受賞に相応しいとの選考結果が報告された。1件は、株式会社パウレックの長門琢也氏による「コンテインメント固形製剤装置『CTシリーズ』の開発」、もう1件は、大正製薬株式会社 矢島稔央氏による「噴霧凝固造粒法による苦味マスキング技術」であり、この報告のとおり、承認された。なお、授賞式と受賞講演は本年10月の第20回記念大会で行われる。

以上で総会の議事は滞りなく終了した。

このあと、岡田新会長から以下の就任の挨拶があった。



岡田弘晃新会長の挨拶

大変な仕事を請け負った、歴代の会長のあと荷が重いが会員の意志としてお受けしたい。協力・ご指導を願いたい。平成22年度は設立20周年の節目の年、成人式を経て一般社会人となる。会員の皆様のテーマをベースに飛躍し、社会的なステータスを得るために計画を達成したい。法人化については板井先生が調査をしてくれており、推進したい。20周年記念大会は、前々会長の寺田先生が中心になって準備が進んでいる。記念出版のハンドブックは秋の記念大会に向けて無料配布の予定。また、シンガポールの会社を訪問する見学会も記念事業のひとつである。この研究会は産官学が集まり、win-winの関係でジャンプアップする大変ユニークな会である。飛躍を目指して頑張りたい。この飛躍のために、研究会の名前を学会にしたいとの考えもでていいる。今後検討したい。本会発展のため、皆さんのご協力を頂戴したいと結ばれた。

最後に、第20回記念大会の実行委員長を務められる寺田勝英顧問から以下の閉会の辞が述べられた。本日審議された法人化推進や年間計画行事が進められていく。また、第20回記念大会については「さらなる品質向上を目指して—今何をなすべきか」をテーマとし、すでに講師の予定も確定しつつある。会員には参加・協力を願いたいと述べられ、総会は終了した。

2. 特別講演会総会

総会に引き続き、岡田弘晃会長の挨拶と講師の木村和子先生および細野秀雄先生の紹介があり、2演題の講演会が始まった。

特別講演1は、草井副会長の座長による金沢大学医薬保健研究域薬学系 国際保健薬学教授 木村和子先生による『カウンターフィット薬（偽造医薬品）の蔓延と対策』と題する講演である。特別講演2は、東京工業大学フロンティア研究センター&応用セラミックス研究所教授 細野秀雄先生による『ワクワクする材料研究：新素材から生まれる夢』と題する講演である。カウンターフィット薬は世界戦略を目指す企業には大きな問題点である。また、細野先生はNHKテレビ番組“プロフェッショナル”に出演されるなど、両先生の講演は、共に注目を浴びているテーマであり、興味深いものであった。このようなテーマを選定いただいたことに感謝したい。その講演会の内容について下記のとおり報告する。なお、両先生の講演の内容の詳細については、講演要旨に詳しいので参照願いたい。

『カウンターフィット薬（偽造医薬品）の蔓延と対策』

カウンターフィット薬とは、その正体や出所・起源を故意に偽った医薬品である。有効成分が表示通り含有されているものもあるが、含有量が異なったり、皆無のもの、異成分含有品もある。包装や表示は偽りである。製造者、製造方法は不明であり、内容も保証されない医薬品である。カウンターフィット薬の蔓延が世界的に大きな話題となっているが、流通状況を把握することは難しい。WHOによると、先進国では1%、旧ソビエト連邦諸国では20%以上、多くのアフリカ諸国、アジア・ラテンアメリカの一部では、遙かに高い割合でカウンターフィット薬が流通している。また、流通量は増加の傾向にあるとのことであった。その誘因は、少額の資本で着せき利益性が高い、嵩張らず、貯蔵・輸送が容易で発

見されにくいことにある。また、使用する医師や患者にも識別されにくいことにある。カウンターフィット薬による健康被害は必ずしも十分に把握されていない。効果のないカウンターフィット薬に頼り、本来の治療を受ける機会を逃したり、有効成分の含有量不足・異成分の混入などにより、快復の遅延だけでなく、悪化させ甚だしい場合には生命の危機に至ることもあるとの現状が紹介された。



木村和子先生

このような現状に対し、WHOは国際的なカウンターフィット医療品タスクフォース「IMPACT」を立ち上げた。IMPACTは、カウンターフィット医療品は悪質・重大な犯罪であり、厳しく取り締まり、罰しなければならないとし、ローマ宣言で設立趣意を明確に唱え、世界的な取り組みの中核となった。

このような動きに対し、日本は、国際的な観点から対策強化に向けて地道に活動してきた。(社)国際厚生事業団(JICWELS)は不正医薬品(偽薬)追放戦略事業の他、迅速試験法の発刊、カウンターフィット薬対策第三国研修等を行ってきた。2006年からJPMAが国際協力事業としてカンボジア保健省と「カンボジアカウンターフィット薬対策プロジェクト」を実施し、一般市民が普段訪れる薬局薬店からカウンターフィット薬を多数検出した。木村先生は、国内外の最前線で中心となってこのような活動をされてきた。

幸い日本では、正規の流通ルートへの侵入はほとんど見られない。偽造防止技術として、高度の表示・包装技術を要するが、規制当局の意向も踏まえてコストパフォーマンスの良い偽造防止技術の開発を願いたいと結ばれた。

『ワクワクする材料研究：新素材から生まれる夢』

新材料とは、全くの新材料、高純度化、ナノ化などによる新材料がある。この新材料へのアプローチについて事例を挙げられた。鉄、セメント、ガラスなどは現代建築を支える材料として安価で大量に使われており、優れた環境調和性を有している。このような素材から超伝導、透明金属、透明トランジスタという電子が活躍する機能性材料を作り出すことができた。何れもできるとは考えられなかったことである。この中には透明トランジスタのように、内外の企業群によって次世代ディスプレイ開発を目的に競争して研究が進められているものや、鉄系超伝導のように研究が世界的ブームになっているものもある。これらの展開は、当初から狙っていたものではなく、かといって全くの偶然でもない。材料研究の奥深さと醍醐味、物質の多様性と可能性を実感していると講演された。



細野秀雄先生

1) 透明電子活性については、JSTのERATOプロジェクトに提案。1999年「透明化電子活性プロジェクト」を開始、所期の目的をほぼ達成した。その後、2004年10月から継続プロジェクトERATO-SORSTに採択された。2) 透明アモルファス酸化物半導体(TAOS)については、ERATOプロジェクトの下、アモルファスの弱点を克服した電子移動度の大きな透明アモルファス酸化物半導体の開発に門戸を開き、現在、この研究は、次世代ディスプレイとして国内外の企業で実用化競争が行われているとのことであった。3) ユビキタス元素協同戦略として、石灰とアルミナという安価でありふれた酸化物からなるC12A7、その組み合わせと構造の工夫次第で、超伝導の他、思いもよらぬ機能を実現できるということを実感したとのことであった。4) 超伝導の新鉱脈：鉄ニクタイド系超伝導体として、鉄は超伝導にならないとした常識を覆したインパクトの大きな研究成果であり、この成果発表の後、爆発的に研究がなされ、細野先生の論文が最も多く引用されているとのことであった。

上記の事柄は、いずれも10年前には予想もできなかったこと、物質の持つ隠れた潜在能力と驚くべき多様性に驚嘆せざるを得ないと結ばれた。講演には、上記の研究成果と共に、先生の研究環境・研究姿勢などの話などを交えられ、きわめて興味深い講演であった。